つばさ TSUBASA

令和元年度 生涯学習課だより

第333号(1月)

新年を迎え、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

本年も職員一丸となり、本町の教育行政の充実・発展に向けて、子年だけにこつこつと粘り強く取り組んでまいりますので、変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

～小噺～子年あれこれ

今年は子年になりますが、なぜ十二支の中で最も小さく非力なネズミが干支の1番目なのでしょうか？

十二支は中国のお話になります。道教の偉い神様である玉皇大帝(ぎょくこうたいてい)が、自分の年が分からなくて困っている人間が年を数えられるように、動物たちに十二支を決めるための競争をさせた…というところまでは知られていると思いますが、ここから違う展開があるのをご存知でしょうか。

①ネズミが猫に嘘の日を教えて牛に乗り、ゴール寸前で牛の背中から降りて1番になった。

②ネズミと猫は、最初は仲良く牛の背に乗って進んでいたが、途中にある川でネズミが猫を突き落とし、ゴール寸前で牛の背から降りて1番になった。

他にも違うあらすじがあるのですが、どのあらすじでもネズミによって十二支に入ることができなかったために、それ以降、猫はネズミを恨み、姿を見るや追い回す天敵となった…という見事なオチがつくのは同じです。①の方が一般的に知られているあらすじではないでしょうか。

この2冊は中央公民館図書室にある本になります。左が①、右が②のあらすじとなる絵本です。

右は猫視点でお話が語られるのがとても面白い作りになっています。お子さんに干支の成り立ちを楽しみながら覚えてもらいましょう。

このお話ではネズミは意地悪でずる賢いですが、他の昔話では知恵があるか、意外に義理堅いところがあるように描かれることが多く、相場の世界では多産のため繁栄の象徴とされ、子年は上げ基調になると言われるなど、実にめでたい存在です。

2020年の子年は庚子（かのえね・こうし）と呼ばれる年であり、「庚」は成長が止まり新たなものに変化することを意味し、「子」は増える、始まりを意味すると言われます。庚と子は相生の関係にあり、順送りに相手を生み出していく陽の関係にありますので、なかなかにめぐりの良い年になるかもしれません。いや、そうであって欲しいものです。